

「認知症ケア」の最前線

宇治おうばく病院の取り組みと「認知症のいま」について

栄仁会は、認知症の人々を支える京都南部の中核医療機関として、地域のニーズに
応えています。認知症ケアの最前線で働くドクターとスタッフに、宇治おうばく病院
の取り組みと「認知症のいま」について、お話をうかがいました。



羽鳥恵一 (はとり けいいち) / 精神保健福祉士



堀井いつ子 (ほり いつこ) / 看護師



樋川 毅 (ひかわ たかし) / 精神科医

認知症をめぐる「時代の潮目」が変わった

Q 日本における認知症高齢者は、2025年には700万人を超え、「高齢者5人に1人が認知症」の時代がくると推計されています。そのことをふまえ、政府も国を挙げて認知症対策に取り組み始めています。宇治おうばく病院は「認知症治療病棟」を有するなど、先駆的に取り組んできました。認知症が大きくクローズアップされているいま、以前と比べて「時代の変化」は感じますか？

樋川 私が宇治おうばく病院に入職したのは21年前の97年で、当時はまだ介護保険制度が始まる前でした。そのころから認知症治療に携わってきたのですから、当然、時代の変化は感じますよ。

たとえば、私は20年前から保健所の嘱託医をしていますが、当時は保健所に認知症について相談できる人が少なくありませんでした。ほかに相談できる機関がなかったからです。いまなら「地域包括支援センター」（高齢者の暮らしを地域でサポートする拠点）がありますからセンターに相談に行けばいいわけですが……。

また、当時は一般病院が認知症の患者を受け入れること自体、ほとんどありませんでした。たとえば、骨折した患者が認知症であったら、一般病院では骨折の入院治療すらしてくれなかったものです。

羽鳥 いまは、昔に比べれば格段に、一般病院も認知症患者を受け入れてくれるようになりましたね。認知症の鑑別診断（他疾患ではなく認知症であると鑑別する診断）も一般病院でできるようになってきました……。